

百済と日向

―「百済王伝説」をめぐる考察

南邦和

本稿は、二〇一三年一〇月一五日 韓国・高麗郡の
高麗博物館で催された〈韓・日文化の夕〉(加耶大学
校・高麗郡共催)での講演要旨です。

私たちの住んでいる宮崎県の古い呼称(地名)は日向(ひむか)くひゆうが)であるが、古代における「日向」は南九州一円を指すかなり広い地域の呼称であったようである。つまり、まつろわぬものとして大和朝廷に敵視され、やがて征服された熊襲(くまそ)隼人(はやと)の支配していた熊本・鹿児島・宮崎をつつみ込む一帯が「古代日向」の領域と考えられる。

韓半島とこの「日向」との結びつきを考えると、そこにいろいろな歴史的因縁や文化的接点を見出すことができ

る。たとえば、現在大噴火で話題となっている新燃岳を含めた霧島連山の主峰「韓国岳」は、その名の示すとおり「韓国(からくに)」につながっているが、その命名の由来はいまだ明らかではない。俗説では、この山の頂に登ると韓の国が見える……という「国見岳」に似た発想からの言いつたえがある。

古代の人々が、その「本貫」の地であった「韓国」を偲んで呼び慣らわした山の名であることは容易に想像できる。宮崎県内に多く点在する(四千基とも言われている)

古墳の主たちが、韓半島からの渡来者たちであったという証拠は、その出土品からも明らかである。現在、私の住居地である宮崎市下北方地区にも〈下北方古墳〉と呼ばれている古代史研究の上では注目すべき埋蔵文化財がある。

宮崎市が「市政六十周年」を迎えた一九八〇年代半ば、宮崎県内の古墳群をめぐつての「宮崎の古代を考えるシンポジウム」が、三年連続（昭和58・59・60）のシリーズとして取り組まれたことがある。この地方にとつてはまさに画期的な、学術的なイベントであった。私自身もこのシンポジウムにフロアの聴衆の一人として参加しているが、齊藤忠（東京大学教授）網干善教（関西大学教授）西谷正（九州大学教授）賀川光夫（別府大学教授）らに地元の日高正晴（西都原古墳研究所所長）を加えた豪華なパネリストによる論の展開には、十分な聞き応えがあった。

その中で特に注目を浴びたのは、〈下北方古墳群〉の第5号地下式横穴から出土した「金製垂飾付耳飾」についての西谷教授（当時は助教授）の講演であった。「日向の古墳文化における大陸系要素」のテーマで発表されたこの西谷発言の中で、下北方からの出土品は明らかに「伽耶系もしくは百済系のものである」と指摘されている。つまり、

これらの古墳の被葬者たちが、伽耶、百済につながる人々であったということの証明にほかならない。

このほかにも西谷教授は東諸県郡国富町六野原の第14号地下式横穴出土の「有蓋高坏」について、伽耶系陶質土器の舶載からの須恵器、児湯郡高鍋町の持田古墳第28号墳出土の「単鳳文」や第34号墳出土の「三葉文のある大刀の環頭」について、その類似品が百済・伽耶・新羅に見られることを発表している。また、各種馬具の出土を通じて、五世紀後半のこの時代「日向」の地でも乗馬の風習がはじまつたことにも触れているが、きわめて興味深い指摘である。

この〈下北方古墳群〉については、在日の作家として有名であった金達寿の古代史関係の代表作「日本の中の朝鮮文化」（講談社刊／全12巻）の中でも触れられている。金達寿の来宮は一九八八年の春であるが、同行した記録映画作家辛基秀と共に現地を探索しながら「どこの庭も古墳―下北方古墳群」の見出しで、この地区の古墳に好奇の眼を向けている様子がヴィヴィッドに伝わってくる一文である。

この中でも、金達寿はさきの西谷正の講演レジュメに触れ、日向の古墳と南部朝鮮との結びつきを、これらの出土